

「御救」から「御備」へ -松平定信「寛政の改革」にみられる社会安定策-

著者	宣 芝秀
雑誌名	日本思想史研究
号	44
ページ	29-47
URL	http://hdl.handle.net/10097/56514

「御救」から「御備」へ

松平定信「寛政の改革」にみられる社会安定策

宣 芝 秀

はじめに

本稿は、日本近世社会において「社倉」および同原理を持つ一連の政策が、十八世紀後半、寛政の改革を機に全面的に浮上したことに注目し、その思想的意味の一端を、松平定信（一七五九—一八二九）の言説の分析を通して説明することを企図するものである。

周知のように、寛政の改革は、当時の老中首座松平定信によつて主導されたもので、一般に、社会の諸矛盾を重農主義的な政策によつて解決を試みたものとされる。すなわち、前の田沼時代の重農主義政策の矛盾が農業労働力の減少として現れ、それが領主の年貢収入の激減、幕府財政の逼迫へとつながっていった。その渦中で、天明の飢饉が発生し、ついには將軍のお膝元の江戸で起きた打ちこわしが決定的な要因となつて、定信政権が成立する。そういった成立背景のゆえに、定信政権は一揆・打ちこわしの防止をその最大の目標とする。その対応策として取られたのが、

各藩における田圃令や江戸における七分積金令などの備蓄を奨励する政策であつた、という流れである。

こうした定信の備蓄の構想は、幕府の根本的な政策指針上における極めて重大な変化であると位置づけることができる。なぜなら、これまで幕府は飢饉の際に「御救」を施すことによつて正統性を保持することができたが、それを各領村が「御備」という各自の備蓄で解決する政策へと変化したことの意味は、幕府権力の正統性と深く関わる問題だからである。この点で「御備」という政策は、幕府と藩との関係、さらには幕府と「民」との関係に、イデオロギー的な変化をもたらせる可能性を含んだものと判断され、したがつて、その内実を明らかにすることは、当時の社会の変化を理解する上で重要な作業になると思われる。それを、たんに反動的「重農主義」といった一言で切つて捨てることはできないのである。

「御救」について、かつて宮澤誠一は「幕藩制仁政イデオロギー」という視座を提示し、徳川幕府の支配の正統性が「委任」と「御救」という要素によって成り立っていることを明らかにした。⁽³⁾「御救」論とは、領主側が「強き百姓」の創出をめざし、小農経営の維持と年貢の皆済という矛盾した要求を同時に実現したもので、年貢の上納がもたらす小農経営の破綻を、「御救」を繰りかえすことによって回避できるという「仁政」秩序の構造を指す。またそれは、小農支配の論理のみならず、藩が幕府から救済資金を「拝借」するように、幕府が「御救」の積極的な統括者であるという論理構造をも有している。

近年の「仁政イデオロギー」研究では、若尾政希や小川和也らが、「仁政イデオロギー」が時代とともに幕府レベ⁽⁴⁾ルから藩、藩から村に下降していく様子を分析している。本稿では、こうした先行研究の「仁政イデオロギー」の有効性を認めながらも、それがそのまま下に移行し、裾野を広げていく側面よりは、上記のイデオロギ⁽⁵⁾的変質自体に注目したい。幕府支配の一つの軸をなしていた「御救」に変化が生じ、「御備」に切り替わることに着目することによって、社会諸要素の関係を如何に再編していくかという狙いに光りを当てることを、本稿の主目的とする。

そのため、第一節では「御救」から「御備」へと政策指

針が変化する様子を検討し、第二節ではそれを支えた思想的背景を松平定信の「民」観と「国」の経済観を通じてみることにする。最後に第三節では実際に実施された「御備」の内実の諸様相を明らかにする。

一、「御救」から「御備」へ

寛政元年（一七八九）九月、定信は勘定奉行に対して「御備」を全国的に実施するよう以下のように命令を出した。まず、その全文を引用しておこう。

近年御物入相重り候上、凶年等打統、御手当御救筋及莫大候付、追々御儉約之儀被仰出候得共、天下之御備御手薄二有之候ては不相済儀二思召候、依之享保之儀、例を以、上納米も可被仰付候得共、当時不如意多之儀、且凶作等二て難渋之砌二も候得は、不被及御沙汰候、乍然広大之御備之儀二候得は、当時之御儉約のミを以、其御手当二可被仰付様も無之候間、高き万石二付五十石之割合を以、来戌年より寅年迄五ヶ年之間、面々領邑二困穀いたし候様二被仰出候、尤於公儀も右割合を以御備米被仰付候儀二候、元非常之御備之儀二付、其領邑二て面々備置候得は、天下之御備二相当り候儀二

て、御安心之儀二思召候、天下之御用度二被為当候節は勿論之儀、其領邑非常之節は、御沙汰之御程も可有之儀二候条、一統節候相用ひ、右体有用備向等専一二可被心掛候。

（近年は出費が重なる上に、凶年が続き、「御手当」や「御救」にかかる費用が莫大になったため、次第に儉約令も出されたが、全国の「御備」が不十分なのは立ち行かないとお考えになった。そこで享保の前例に従って、上納米を命じる手もあったが、今日は経済的困窮も多く、かつ凶作のため苦しんでいる時でもあるから、その指示を出すに至らなかった。しかしながら、広大な「御備」であるので、今の儉約令だけで、その「御手当」にすることもできないため、一万石高につき五十石という割合で、来年から五年間、各領村に配給の実施を命じられた。尤も公儀においても同じ割合で御備米を設けられるということである。本来、非常の「御備」であるから、その領村においてそれぞれ備え置けば、天下の「御備」にも相当し、安心できるとお考えになった。全国に必要がある時はもちろんであるが、その領村の非常の時は、それを用いる指示が下されるであろうから、みな一丸になつて節約につとめ、上記の有事に向けた備えを専一に心がけなければならない。）

冒頭、幕府の出費が重なつたというのは、以下のことを指す。天明七年（一七八七）、徳川家斉が第十一代將軍職を継いで間もなく、翌年一月には京都で大火が発生し、禁裡御所が焼失した。再建のため異例的に幕府に御所造営總奉行がおかれ、その役を任された定信は、焼失前と同じ規模

の御所造営を提案したが、光格天皇の強い意志により復古的な御所が造営された。これらによって、幕府財政の負担は大きくなつていた。これ以外にも、天明年間の度重なる凶作は、東北地方を中心に大飢饉を生んでおり、米価の高騰によつて諸国における飢民蜂起、江戸・大坂の都市での打ちこわしを惹きさせていた。もはや古典的な儉約令だけではこうした状況への救済は困難であり、ここに「御備」を強化する必要性が生じたのである。そうした認識に立つてこの触書が出されたのである。

では、なぜ定信は「御備」の必要性を強調するようになったのか。その理由の一つに、本文中でも享保の前例として言及されている「上納米」の実効性に対する疑念があつたと考えられる。

それは、定信が老中に就任する直前に、東北諸藩に対して「上納米」が命じられたが、これによつて江戸の打ちこわしを食い止めることはできなかった事実があつた。「上納米」の調達と運搬に相当な時間がかつた上、江戸付近まで運搬された「上納米」は、米商人の妨害により、適時に流通することができなかったためである。対応策としての「上納米」の機能劣化が露呈したのであり、したがって各地に「御備」を設けることで全国の「御備」ともする方向に政策指針がシフトしたと推測される。

ところで、「御備」つまり「圀穀」の実現には時間が必要である。上納米のようにその時の必要に応じてすぐ入手可能なものではなく、数年間の蓄積によつてはじめて可能になるのである。そうした仕組みと、飢饉救済という目的を持つ施策は、東アジア世界では「義倉」または「社倉」と呼ばれた。

「義倉」と「社倉」は、貯蓄する穀物を貧民に直接貸し付ける役割を持っていたが、両者の相違点は、「義倉」の場合が財政と運営が全的に国家によるものであるの对比べ、「社倉」はより地域に密着し、かつ民間の主体的運営をも狙ったものであったという点である。

定信の「御備」「圀穀」の構想は、幕府レベルでも行うという点では「義倉」の性格をも持つものであるが、各地において「御備」を実施するという点では「社倉」の性格が強いといえる。しかし、「御備」を各地域に設けるからそれが地域に帰属するという認識は希薄で、あくまでも国の「御備」として考えられていたことも見逃すことはできない。その点では、各地における「御備」は、当該地域の経済力の向上を目指したというよりは、上納米に欠けていた迅速性を確保しながら、その管理と所有は国家に帰結するところにその目的があつたものといえよう。

ところで、各地域において自ら「御備」をしておくとい

うことは、従来のように幕府からの「御救」をまたずに、自らの「御備」によつて自力救済することの意味する。それは、これまで幕府と藩の間で幕府権力の正統性を保証していた「御救」の役割に亀裂が生じることであり、そうであるならば、各地における「御備」の実施とは、幕府権力の正統性を揺るがす可能性を秘めているということもできよう。

「圀穀」をめぐる幕府と藩の關係について、安藤優一郎は「圀穀令は『天下之御備』の充実という本来果たすべき課題を、財政悪化を背景に幕府が藩側に転嫁したものと⁽¹⁰⁾とし、一方的に上から下に責任を「転嫁」した措置として「圀穀」を位置づけている。しかし、幕府が経済的緊迫からその責任を藩に強いたことは、たとえば上納米の例から考えると、幕府に一旦上納させた後、それを再び「御救」として下賜するという仕組みなのだから、幕府の財政悪化とは基本的には關係ない。「圀穀」の実施が幕府を介する過程を無くすということの意味も、幕府に対する關係の基本方針が「御救」から「御備」へと発想を転換したという点から再考する余地はある。一概に責任転嫁と断定するのは尚早ではないか。

一方、上安祥子は「圀穀令で幕府は藩の枠を超えた社会」というものを想定し、またそうした「社会」を諸藩に認識

させようとし、また社会全体の利益すなわち「公益」への貢献を、開穀として求めている」とし、幕府が藩に藩を超えた社会の存在とその全体の利益を自覚させるという目的から「開穀」を実施したとする。しかし「開穀」は当該地域における救済の場合も、その他の場合も、利用に当たっては幕府の命令に従わなければならなかったし、その所有も幕府に帰するものと規定していた点がここでは十分に考慮されていない。

さらに、両者とも「開穀」の実施を、幕府と藩の關係のみに限って検討しているが、定信政權が江戸の打ちこわしを直接の背景として成立したことから推測されるように、幕府と藩との關係よりも、むしろ幕府と「民」との關係を如何に安定させるかがより重要な事案である点が見逃されている。したがって、こうした観点から「開穀」を検討する過程が必要であろう（第二節で後述）。

ところで、定信の全国的な「開穀」の実施は、定信以前の政策からすると、異例的なものであった。このことは案外見過ごされやすい。

徳川幕府は当初から原則的には諸藩の蓄穀を禁止しており、公式的に貯穀ができたのは、幕府みずからが、条城、大坂城、駿府城において年貢米を貯える他は、軍事的見地から城詰米を譜代大名、直領大名が貯え、その管理は勘定

奉行直屬の下に置いていたのである。したがって、全国的に「開穀」の実施を命じたのは、これまでの備蓄政策からすれば極めて大きな転換である。

こうした定信の「御備」政策が持つ特異性は、前の田沼政權のそれと比べると一層明確となる。次は田沼時代の触書である。

諸国共近来米穀高直二有之候上、別て去年以來直段引上、輕者共及難儀候趣相聞候間、米商売ものは勿論、其筋渡世二不致ものにて、不相当之石数買持候儀致間敷候、其外町々在々之もの共、銘々当年新穀出来迄可取統手当之外、余計之米穀不開置、其土地は不及申、他国えも売出候様いたし、并諸国之廻米道売道買等決て致間敷候、若他之難儀をも不顧、余計之米穀開置候か、又は道売道買等致候もの於有之は、吟味之上御仕置可申付候（中略）右之通、諸国御料は其所之奉行、御代官、御預所、私領は領主、地頭より町々在々浦々迄、不洩様急度可被申渡候。

（諸国では近頃、米穀の値段が高騰して、とりわけ去年から値段が上昇し、身分の低い人たちが困難になっていることを耳にした。米商はもちろんのこと、それを専務としない者であっても、不相应の石数の米を買ひ占めることをしてはならない。その他に町々村々の人々もそれぞれ今年の新米ができるまで生活に必要なものの以外は、余分の

米穀を囲い置かず、その地域は言うまでもなく他地域に米を売り出すことをしたり、ならびに年貢米を江戸に送る途中で売買したりすることは決してあつてはならない。もし他人の困難も顧みず、余分の米穀を囲い置く行為をする者、または江戸に送る途中の米を売買する者があれば、事情を把握して処罰すべきである。(中略) この指示は、幕府

直領の諸藩においては、奉行・代官・御領所より、私領においては領主・地頭より、すべての町、村、漁村まで漏らすことなく必ず告げ知らせべきである。)

資料の背景について少し説明しておこう。凶作が続く天明四年(一七八四)は各地で米穀の値段が高騰し、特に天明三年(一七八三)からは深刻な値上がりで、下層民が困窮に陥つたことに対して幕府は重大な問題として取り組んだ。値上がりの原因の一つには町人の米買い占め行為があり、またそれを助長した町人たちが打ち壊される事態に発展したため、相応の分や、生活に必要な量以外の米穀を買い占めること、及び囲い置くことを禁止する「囲穀」禁止令を出すに至った。それも米商人のみならず、他業種の町人、民間のあらゆる階層の人々にも適用されるよう求めている点が注目される。

と同時に、年貢米を江戸に送る途中で売買する行為も併せて取り締まったことから分かるように、幕府の管理内に収まらない米の流通の現状があつた。その解決のため、出

沼政権は民間の「囲穀」を一概に封鎖したわけであるが、これと反対に定信は、あるいはその弊害をも知った上で、私的レベルの「囲穀」から公的レベルの「囲穀」への転換を試みたといえよう。

さらに、定信の「囲穀」の実施をこれまでの幕府の「御救」との関係から考える際、注目すべき事件がある。それは、天明七年(一七八七)に、これまで民間から幕府や藩に提出されていた「御救願い」、「御慈悲願い」が、天皇へ直接訴願され、それを受けて光格天皇はさらに幕府に「御救」を要請するという前代未聞の出来事が発生したことである。ここから推測すれば、幕府の「御救」権限に対する不信が社会的問題となつたことがきっかけとなつて「御救」を新たに位置づけ直す必要性に迫られ、その流れから「囲穀」令が出されたと見ることができるといふ。つまり、以下のごとき意味である。

江戸の打ちこわしが幕府と「民」との間で発生した事件であつたのとは異なり、天皇に「御救願い」を出した事件は天皇を介在した幕府と「民」の関係の変動であつた。それに対する「御救」として、従来の幕府の「御救」から諸藩の「御備」によるそれへと政策指針がシフトしたことは、単なる政策転換に止まらず、幕府・藩・天皇・民などの幕藩制社会の諸要素の関係において、相互変化の契機を孕ん

でいることを意味する。

結局、「困穀」の実施は、各地域において飢饉に迅速に対応することを可能にし、またそれを公的なレベルで行うことによって、幕府と「民」の間での「御救」を新たな形で保持し直すことを目指したものだといえよう。それによって幕府と藩の「御救」の関係の根幹が揺るがされる危険性を内包しながらも、基本的には幕府と「民」の関係の安定化を図る政策であつたと評価することができる。

二、松平定信の「民」観と「国」の経済観

それでは、そもそも定信は「民」について如何なる考えを持っていたのか。定信は天明元年（一七八一）、「民」と「国」の關係の考察を主題とする『国本論』という書物を著した（その付録には「社倉」に関する諸説が集められている）。まずは、その序文に表明されている定信の「民」観を確認しておこう。

君以^レ有^レ民得^レ為^レ君、民亦以^レ有^レ君得^レ為^レ民。君不^レ君民安能得^レ為^レ民、民不^レ民君亦安能得^レ為^レ君。以此觀^レ之、民則固邦本、而君之所^レ以得^レ為^レ君者也。

（君は民が存在してはじめて君であることができ、民もまた君が存在してはじめて民であることができる。君が君らしくなければ民はどうして民であることができ、民が民らしくなければ君はどうして君であることができるか。以上のことから、民はまことに国の根本であり、君が君であることを可能にさせる根拠であることがわかる。）

定信は「民」を「君」と不可分の関係にあるものとして認識していた。むしろ、定信以前にも「民」の存在を重視する思想は伝統的に存在しており、定信が引用した『書経』の「民惟邦本、本固邦寧（民といふのは邦の根本である。根本が固ければ邦は安寧である）」⁽¹⁾もその一つの有力な例である。『国本論』の書名がここから採られていることから分かるように、「民」は「国」の根本であるという『書経』の語を踏まえながらも、しかし、定信の叙述の重点は、「民」をさらに「君」が「君」であることを可能にさせる根拠として位置づけ直すという点に置かれている。

ここから伝統思想と区別される定信の「民」観の特徴が読み取られる。それは、これまで「国」の経済的基礎という含意しか持っていなかった「民」の意味が、「国」の存在根拠、もっと言えば、「君」の国政運営機能の根拠にまで、その領域を拡張している点にある。このように考えれば、これは明らかに「民」の位相の再定位を意味するもの

と見なせる。

ところで、当該時期に「民」の存在が浮上する傾向にあったのは、たんに日本に限ったことではない。韓国における近年の研究では、十八世紀の朝鮮王朝社会において、これまでの「民本」思想に代わって「民国」思想が新たに登場したという。すなわち、同時期の国王であつた正祖（一七五二—一八〇〇）は、一連の政策を通じて君主と民とが直接に繋がることを図つた。それは、臣権を強化しようとする意図からなされたことではあるが、しかし、その背景には、当時「民」の政治・経済・社会的疲弊が深刻化していくという状況があり、その保護の必然性が生まれたという事情がある。その結果、「民」保護意識が浮上し、「民」の重要性が自覚・強調されたという見方である。

定信の生きた時代もまた、度重なる凶年と飢饉で「民」の疲弊が強く意識された時代であることは言うまでもない。こうした困窮する「民」への眼差しが『国本論』に見える「民」の再定位につながつたであらうことは、同時期の東アジアの文脈の中においてみれば、一層鮮明となるのである。

『国本論』の本文の内容をもう少し詳しく確認してみよう。冒頭では「易経」⁽⁹⁾「剝」の象伝が引用され、「君」は山であり、「民」は土であるとし、さらに山は土がなければ

存在できないと述べられている。⁽¹⁰⁾ここからも定信が「君」と「民」を一体として把握していたことが分かる。他の箇所でも『書経』などの経書を引用しながら、専ら「君」と「民」の関連性が論じられている。

ここで大事な点は、それらの一連の記述から、実は限りなく君の特権が相対化され、限定化される指向性が読み取れる点である。すなわち、君主には私の国、私の財、私の民というものはなく、すべて天の土、天の財、天の民であると言われるが、これは「君」の絶対的權威を「天」によって保証する論理なのではない。たとえば国民を治めることができるのも、先祖の恩恵であり、「君」という位によるのではないといった言い方からも推測されるように、すなわち、「君」と「民」は同じ人であり、その中には根源的な差はなく、あるのは徳器の上下の差であることが、しきりに強調されるのである。⁽¹¹⁾

徳の重視は他でも見ることができる。たとえば、定信が天明四年（一七八四）ごろに著したとされる『大学経文講義』がそれである。

けんやくは下を厚くして国の本をつよくする事なり。たくはへあるところも君の横費に備るにはあらずして、国の凶年不時の物入を弁じて下のなんぎにならぬ

様にする事也。しかるゆえたくはへの米金は一錢一粒も君のものにてはなし、これは国家の米金也。そのたくはへるといふは君の身の質素にして無益の費なき様にするのみの事なり。君質素をこのめば臣民その風におしうつりて質素けんやくをつとむるゆえ、君の身代よりして臣民のうへまでみなく困窮をまぬがる、様になり行は、下のいよく厚くなる事なり。下の厚きは国の本の強きにして、山の麓あるがごとくなるなり。^(註)

(儉約は下を豊かにして国の根本を強健にすることである。貯えが存在するのは君が妄りに使用するため備えるのではなく、国の凶年の非常時の出費に当てて、民が困難にならないようにすることである。したがって、貯えた米と金は一切、君の所有ではなく、これは国家の米と金である。その貯えるというのは君が身の回りを質素にし、無駄遣いをしないことだけである。君が質素を好めば、臣民もその風に移つて質素と儉約を努めるから、君より臣民に至るまでみな困窮を免れるようになることは、下がいよいよ豊かになることである。下が豊かになることは国の根本が強くなることであり、山に麓があるようなことである。)

定信は既述の『書経』の「民惟邦本、本固邦寧」を下敷きにしながら、「儉約論」を展開している。彼は「儉約」について、まず「君」の「儉約」の実践が果たされた後、それが「臣民」への教化へと繋がるものと言う^(註)。この際、強

調点が「君」の徳性の向上を要求するところにあり、一方的に上から下に強制するところにはなかったことが分かる。

定信の「儉約論」の特徴は、それがたんなる経済収斂をめざすものではなく、「貯え」、すなわち備蓄と関連して論及されている点である。とりわけ、その「貯え」は専ら「君」の「儉約」によって達成されるべきとみた点、しかしながら「君」の「儉約」による「貯え」が「君」のものではなく、「国家」の所有であるとした点は、注目すべき点であると思われる。

さらに「国家」の所有である「貯え」を、定信は「民」の救済のために使用するものと考えていた。その理由として、「民」が豊かになることが、「国」の根本が強くなることに繋がるとされている点から、定信の志向性が「国」の富強にあったことは容易に推測できる。結局、定信の「儉約論」は、「儉約」する「君」による「貯え」が、それと不可分の関係にある「民」の救済という、上から下への働きかけとなり、今度はそれが「国」の富強という形で下から上に働きかける循環構造をなしていたといえよう。すなわち、定信の「儉約論」からは、上下の循環によって「国」の安定化を図る構想が読み取れる。

定信は「貯え」のみならず、そもそも金銭や物資を「君」の私有物として考えていなかった。所有は、限界を定めることになるからである。

損は上を益し益は上を損ず。上を損じて益するの理にあたるをしるべし。それ金は天下の金にして一人の金にあらず。さすれば天下の金はわが金なり。徳あるものは天下の財を用う。一人の金にせんとすればわが身の持所の外一金の金なし。天下の財を用いればわが身の外の天下の金みなわが用をなすなり。また国を治め天下を平にするものは、わが用を節して天下のたくはへをして、天下民を生育せば、これまた一人のたくはへになさざる故、本正しくして蓄積もとり出るのうれひなし。

(損は上に益を与え、益は上に損を与える。上が損して益になるという理になつてゐる点を知らなければならない。そもそも金は天下の金であつて一人の金ではない。そうであれば天下の金は自分の金ともなる。徳ある者は天下の財を使用する。自分一人の金にしようとするれば、自分が所有している金しか金がない。天下の財を使用すれば私の所有していない天下の金すべてが私の使用対象になる。また国を治めて天下を安定にしようとする物は、私的な費用を節約して天下の貯えをなして、天下の民を生育すれば、これもまた一人の貯えではないので、根本が正しく、蓄積が道理に外れて流れ出る憂いがない。)

定信は、経済を「上」と「下」の相関関係から成り立つものとして捉え、その総体を「天下の財」と言った。このことの含意は、たとえば時間とともに発展していく経済観で

はなく、予め全体の規模が想定され、それを維持することを理想とする経済観に定信が立っているということである。また、それが上下の相互作用から保たれるとする点は、前述の上下の循環によつて社会の安定を図ったことと同様の考え方に基づくものと思われる。

この全体の財をいかに運用するかに、定信の問題関心があつた。すなわち、「上」の財のみを対象として経済をやりくりするのではなく、それを含めた全体の財の相関的、総体的運用こそが「上」の役割であるとする。その際、必要な資質として、たとえば一人の個人の金銭という限定された枠に捕らわれるのではなく、全体を鳥瞰できるような観点⁽²⁾が挙げられている。

また他の要素として「徳性」が言われているように、一貫して「上」の徳性を強調する定信の姿勢が読み取れる。すなわち、徳に基づいて私的な費用を節約して「貯え」を設け、それによつて「民」を生育することが、一つの役割モデルとして提示されている。

さらに、こうした徳にもとづく「貯え」は私的なものではないため、道理に外れて減ることがないと言及されている⁽³⁾。ここから、定信が「貯え」について、私的性を排除すること、また減らすことなく永続できることを、『大学』を論理的な根拠として理想としていたことが分かる。

以上の定信の経済観は、第一節で検討した各領村における「困穀」実施の構想においても見出すことができる。飢饉への対策として設けられた各領村の「御備」は、天下の「御備」にも相当するとされていた。「上」の所有ではなく、天下の物であるとする認識がここにも貫かれている。さらに、「御備」の構想そのものが、「天下の財」に対して私的性を排除していかに運用していくかに関する一つの答えであったといえよう。

しかし、考えておくべきことは、藩と幕府の財を同レベルとみることができるといふ問題にかんしてである。この点に関してはさらに詳しい検討が必要と思われるが、現段階では以下のように説明できると思われる。つまり、老中という立場から定信は、各藩の財を「天下の財」の一部として捉え、したがって、藩の立場にとつては不本意な面があったとしても、藩の「御備」は天下の「御備」として、全体を鳥瞰する「上」の立場から運用していく、そういった国政運用を定信は志向したのではなからうか。

三、「御備」の内実の諸様相

本節では定信の「御備」の構想に関して詳しく検討することにする。定信の「御備」の構想は、「社倉」の原理に

基づくものとも言えるのであるから、まず「社倉」について確認してみよう。

先にも簡単に触れたように、「社倉」とは、飢饉・貧民救済のために各地に設置した米穀の貯蔵庫を指す。「社倉」の語が初めて見えるのは『隋書』「食貨誌」であるが、最も古い実例は、宋学の祖である朱熹（一一三〇—一二〇〇）の実施に係るものである。朱熹は三九歳の時（建道四、一一六八年）飢饉が発生すると、予備地方官として荒救策に取り組み、社倉を設立してその運営に当たった。貧民救済は朱子の仕官期における最重要事であり、社倉にかかわった時期は主要な著作を相次いで著した時期であるから、思想的側面においても「社倉」の実施は重要な意味をもつものと思われる。日本では一般的に、社倉は自治的な機構であるとされるが、朱熹の時代にすでに半官半民的な要素があったように、中国・朝鮮・日本における「社倉」の実例からすると必ずしも単純な自治とは言い切れない。

日本における最初の「社倉」は、明暦元年（一六五五）、会津藩の初代藩主保科正之（一一六一—一六七二）によって始めて実施された。『会津藩家世実記』巻之十五には同年三月二十七日付の「此春社倉の法相始めらる」という記事がある。正之は「米六、七千俵お買い上げ仰せ付けられ、お代官へお預け置かれ、高利の米を借り候百姓共へ、利安

くお貸しなさ」という命令を下し、大量に備蓄した穀物を、代官の管理下においた。この「社倉」の財源、またその運営は、ともに藩によるものであったことが分かる。

会津藩では「社倉」が実施されて十三年後には、山崎闇斎によって朱熹の社倉に関連する文章が集められ、『朱子社倉法』として刊行された。その他、「社倉」に関する著作の中で、特に注目すべきものとして中井竹山（一七三〇—一八〇四）の『社倉私議』および『草茅危言』がある。『草茅危言』は寛政元年（一七九八）、竹山が定信に提出した政策改革案として有名であるが、一方、『社倉私議』は安永三年（一七七四）に書かれたもので、その大略が『草茅危言』『社倉』に継承されている。まず、竹山が「社倉」をいかに理解していたかについて『社倉私議』の引用から確認してみよう。

始は末々の細民五人七人の身の上の事も、積りくては一國の禍を引起し申事ためし不少候得ば、恐るゝに余りある儀に御座候。是等の患を防ぎ、國の根本を堅め申候には、朱子の社倉の法と申にしく事無御座候。（中略）大いに民間の益に相成、凶年にも年貢を不欠、国用私用とも相潤ひ、村々歡舞して朱子之広恵を戴く事に相成候。

（始めは身分の低い貧しい人の五人、七人のことでも、累積すれば一國の禍を引き起した例が少くなかったから、十分恐れるべきことである。これらの患を防止し、國の根本を強固にするには、朱子の「社倉」ほど良いものはない。（中略）大いに民間に益を与え、凶年にも年貢を欠かないから、国用と私用とともに潤い、村々は喜んで朱子の大きな恩恵を戴く事になる。）

竹山の理解は、「社倉」を民間の組合として認識していながら、その機能が国益の保護と強く結びついているものとして考えていた点の特徴といえよう。社倉に打ちこわしや一揆のような「国」の禍を防止する民衆統制策の役割を期待しながら、また年貢を持続的に取ることを可能にさせる機能を見だし、「国」益という立場から「社倉」を理解していた点が注目される。

こうした竹山の「社倉」観が、「社倉」を「国」と「民」にとつて重要なものとして注目する点では、一見定信の「御備」観と共通する認識を持つているように見える。しかし、定信の場合が、その必要性を「民」の困窮という視点から考えたのに比べ、竹山の場合は、「民」は基本的には、國に禍を引き起こすものとして捉えられている。「国用」「私用」といっても、両者の相關関係もはっきりしない。そもそも「社倉」の目的の根本が年貢の安定的な徴収を図る意図なのだから、定信とは微妙に異なる民衆への眼差しを

持っていたことが読み取れる。

では、次に実際の定信の「御備」政策の内容を検討してみよう。定信は老中就任直後、ある意見書を提出する。ここから定信が何を懸案として考えていたかを把握することができる。『東京市史稿』に収録されているこの文章には「松平定信、凶年に備へ、貯穀・節儉二努ムベキコト等、政務二付意見ヲ呈ス」という題が付されている。その一部を引用する。

十ヶ年以前より郷蔵等之御米も金納二相成、一統二米金銭之風二相成候二付、上下ともに不虞之備うすく有之候処、如前文凶年打続候二付、次第二米穀乏しく相成候て今日二至り候、此うへ万一大風出水等不時之変災有之候ハ、如何之御取計ひ有之候事二哉、その節ハ又々人氣弥相立、町在とも二不静様子有之候て、長崎并二対州、松前之辺も間隙二乗し候心遣之義、有之ましき物二も無之候ハ、救荒之御術も、旧穀乏しきうへハ被成方も有之ましく、御武威之示さるへきも、御恩恵と並び行ハれされハ全備仕かたきもの二候。

(十余年前から、郷蔵などのお米も金銭で上納することになり、すべて米が金銭のようになったので、上下ともに非常時の「御備」が不足しているところに、上記のように凶年が打ち続いたため、次第に米穀が

乏しくなり、今日に至った。この上、万一、台風、洪水などの不時の災害が起これば、如何なる措置が可能だろうか。その時はまた、人々の氣運がますます騒がしくなり、町と村ともに不穏な様子を生じ、長崎並びに対馬、松前の辺境においても、この隙に乘じられる心配もないわけではない。だから、救荒の手立ても、貯えている穀物が少なければ、措置もとりのやがたく、「御武威」を示すにも、「御恩恵」とも行われなければ、充全とはいえないのである。)

郷蔵とは、享保十五年(一七三〇)に徳川吉宗によって実施された置米を指す^(註)。しかし、十年前からは米から金銭に代わって納められていた。だから、定信は当時の実態を「享保之御時つめをかれし大阪の御蓄粉も、半より多くとり出し、江戸の御用米も有名無実になりたりける」といい、江戸と大阪の用米がほとんど無くなり、無名無実な状態にあったという現実があった。こうした状況を定信は、問題としているのである。

この状況で、もし災害が起これ、食糧難が発生すれば、人々の「氣運」が騒がしくなる恐れ、国境線で不穏な動きが生じる懸念がある。つまり、「御威光」が振るわなくなる懸念がある。対内・対外の問題を解決すべき「御威光」も「御恩恵」とともに行われるものであるが、「貯え」なしには「御恩恵」は行われず、つまり、その事態は「御威

光」問題へと繋がるのである。

すなわち、「御威光」と「御恩恵」との相関関係を成り立たせる核心が「御備」の如何に関わっているという認識から、「御備」を懸案として考えていたことが読み取れる。したがって、「御備」の強化こそが、幕府支配の再強化に直結する政策と考えられ、意見書として纏められていたのである。

ここで、定信は第一節で確認したように全国的な「開穀」の命令を出すのである。都会の町人のためには、「社倉」という名で実施をする。定信は大坂・京都・全国の諸藩に「開粉」を実施し、これまでの経験を活かして最後に江戸において「社倉」政策を行った。⁽³⁾ 本節の最後に、その内実を確認しよう。

江戸における「社倉」設置の過程を確認すると、「都て国々ニは諸大名開穀を始として、京・大坂其外其夫々凶年之備有之といへとも、江戸表ニては其備も無之ニ付、町方改正之上、町入用之費用を省キ、右を以非常之備開粉并積金いたし可置候⁽⁴⁾」とあるように、「町入用」の減少から得た資金（いわゆる「七分積金」）を基に「社倉」を設置した。「町入用」とは、町の運営に必要な資金を地主から取ったものであるが、これを節減し、その分を開粉の購入に充てた。⁽⁵⁾ ちなみに、大坂での資金確保もまた「大坂三郷において

志あるものは納むべしとふれたりけるに、人々みな御仁恵に感戴しければおほく出しぬ⁽⁶⁾」というように、富裕層の寄付によるものであった。「社倉」運営にかかる幕府の負担分は呼び水程度に止まったと言われるが、寛政の改革以前の「社倉」は公的な資金をベースにしており、この点が定信の時代のそれと区別される点である。幕府以外の財源から「社倉」の資金を調達したのは、むしろ幕府財政の逼迫という事情もあると思われるが、第二節で確認したような「天下の財」という経済観に支えられていたと思われる。

さらに、定信は、享保の置米の失敗を踏まえ、施策が一過性のものにならないように、永続的なものとして「社倉」を位置づけようとした。次は「七分積金」の効果に関する定信の説明である。

地主ハ人少く小前ハ多人数ニ付、多数之人氣ニ合ひ候事ハ猶更永続可致儀と存候、（中略）永久之儀故、今一応存意尋候事⁽⁷⁾。

この史料の言い廻しからも分かるように、「町入用」の減額分やその使用処については、何回かの調整を経て最終的に決定された。その背後には、「社倉」は永久的に運営されるべきものであるため、より多くの人の意向に添ったも

のなければならぬとする発想がある。また「その減じたるうちの七分は、町々永續囲米積み金の料として」という表現からも分かるように、「社会」を「永久」・「永續」するものとして考えていたことは明らかである。永續を求めるからこそ、少数者の特権ではなく多数者の意向が重視されるのである。このことの意味は、定信が、永久・永續的な「社会」の運営を通じて、「民」との永續的な安定関係の構築を試みたものと解釈できよう。

以上、本節では定信の「御備」には、①竹山とは異なる「民」への同情的眼差しが存在する点、②「御威光」と「御恩恵」との相関関係を成り立たせるものとしての内政・外政的「御備」でもあるという点、③都市地域までも含んだ全国的な経済策であるという点（この一点をとつても、これを「農本主義」の一語のみで評価することは困難だろう。あえていえばリスク管理的食糧経済とでも言えようか）、④永續性の志向などの、諸々の内実が含まれていることを確認した。

おわりに

以上のように、本稿では「寛政の改革」を機に、政策の基軸が「御救」から「御備」へとシフトしたことを確認してきた。では、この変化が起きたのは、なぜか。老中首座

として改革を推進した松平定信の現状認識・「民」観・経済観などの検討を通じて明らかになった点をまとめると、以下のごとくである。

当該期に見られる「御備」の強調は、当時の懸案であった飢饉に対して、各地域レベルで迅速に対応できることを目的としてなされたと思われる。そのことによって、幕府と藩の「御救」の関係の根幹が揺るがされる危険性を内包しながらも、幕府は「民」の関係の安定化をより優先視し、「御救」から「御備」へと政策を変換することで、幕府と「民」の間での「御救」を新たな形で保持し直すことが図られた。以上が第一節の要旨である。

第二節では、定信の「御備」の構想の支えになったであろう「民」観と「国」の経済観について検討を行った。定信は「儉約」について、「儉約」する「君」による「貯え」が「民」を救済し、その結果「国」の富強をもたらしことができる、その目的を理解した。ここから定信の経済観が上下循環的な性格を持つていることが確認され、両者の経済的な安定が「国」の安定と関連して理解されていることも併せて確認した。

また、定信は「上」の立場の人間には、自己の財をも含めた全体の財の相關的運用こそが、その役割であると考えていた。それを可能にするのが「徳性」であり、結果、徳

に基づいて私的な費用を節約して「貯え」を設け、それによつて「民」を生育することが、一つの役割モデルとして提示される。したがつて、「御備」とは、私的な性を排除していかに全体の財を運用していくかに関する一つの答えであつたと理解できる。

以上のことを踏まえて「御備」を藩との関係から考えると、老中という「上」の立場から定信は、各藩の財を全体の財の一部として捉え、藩の「御備」も全体の「御備」として運用していこうとしたものと解釈できる。

第三節では定信が施行した「社倉」の内実について検討を行った。まず「御備」は、内外に対する「御威光」と「御恩恵」との相関関係を成り立たせるものとしてその必要性が考えられた。その際、定信は少なくとも言説としては「民」の「難儀」を鑑みて「御備」を設けるとし、竹山のように「民」を一方的に押さえつける対象とする眼差しとは異なる立場から「御備」を構想した。また、「御備」は各領村のみならず、都市地域においても「社倉」として実施され、その内容から、永続的、総体的な実施を志向していたことが確認できた。

以上、「御救」から「御備」へと政策の基軸がシフトしたことの背景に、「民」との安定的な関係の構築を定信が強く志向したことが分かる。このことの意味は、同時に

東アジアで「民」の存在が浮上したことに共に追求されるべきであろう。また、それは朝鮮通信使の「易地聘礼」の外交問題とも微妙に絡んでいる。それらの本格的な考察は今後の課題としたい。

また、定信の経済観における「道德」の意味が検証される必要があるが、本稿では十分に論及できなかった。本文中にも引用した『国本論』『大学経文講義』はかなりの部分が『大学』伝第十章に基づいている。『大学』伝第十章は、「財用」論、つまり経済論に展開して論じている点で儒教經典中特異な性格を持つものである。定信は『大学』などを根拠とする「道德」から「経済」を考えていたことは間違いない。たとえば、以下の文章はこの点を端的に示すものと思われる。

わすれられずふびんにおもふ誠より出でざれば行とさかぬ事也。されば夫食をやり租税をゆるしたらばよかるべけれども、そこにまた政といふ事ありて、不憫ながらも租税のをさむべき道理をばをさめさせて、また筋なきトリ力をばゆるして、寛といひてもひとつ誠の仁より出れば、下情にちがふことなき道理なり。

(忘れられないで不憫に思う誠より出ない行き届かないのである。そうであるならば、食料を与え租税を免除したら良いわけだが、そこに

はまた政治というものがあった、不憫であるが租税を納める道理を守らせ、また筋のない年貢は免除して、寛容といつてもすべて誠の仁から出ると、下の情に違ふことはない道理となる。」

ここから分かるように、定信が志向した政治は、経済が「仁」によつて支えられて、過不及のなく行われる仁政であつた。それは寛大すぎて食料を無闇に与えたり、租税を無くしたりして、国の運営を不可能にするものではなかつた。そういう間違つた「仁」ではなく、適切な地点を目指す「誠の仁」から出た政治であり、ここに「民の情」と違わない道理に過つた、安定した関係が築かれることが構想されている。このように、「経済」と「道徳」の関係、ひいては「仁政」（ただし従来の「仁政」とは全く異なつた内実をもっている）思想の再定位を検討することは、定信の思想はもちろん、当時の社会を考える上で欠かせない点であると思われる。室鳩巢の思想的影響も改めて考察されねばならないであろう。これらの点に関してはすべて今後の課題に譲らざるを得ない。

註

- (1) 竹内誠『寛政改革の研究』（吉川弘文館、二〇〇九）
- (2) 藤田覚『近世の三大改革』（山川出版社、二〇〇二）
- (3) 宮澤誠一『幕藩制イデオロギーの成立と構造』（『歴史学研究』別冊、一九七三。のち『展望日本歴史十六 近世の思想・文化』東京堂出版、二〇〇二に収録）
- (4) 『太平記読み』の時代（平凡社、一九九九）
- (5) 『牧民の思想』（平凡社、二〇〇八）
- (6) 『御触書天保集成』下「儉約之部」寛政元西年九月、五八九三。
- (7) 藤田覚『江戸時代の天皇』（講談社、二〇一一）二五三頁。
- (8) 安藤優一郎『寛政改革と都市政策』（校倉書房、一〇〇〇）九一〜九五頁。
- (9) 諸橋徹次『儒学之目的と宋学の活動』（大修館書店、一九二九、四八）四八四頁。
- (10) 安藤優一郎、前掲書、三六五頁。
- (11) 上安祥子『経世論の近世』（青木書店、二〇〇五）二二二頁。
- (12) 上田藤十郎『近世の荒政』（大雅堂、一九四七）六〇八頁。
- (13) 『御触書天明集成』「米穀之部」大明四辰年四月、二九〇二。
- (14) なお、『困米売払方督励』（『東京市史稿』産業編第三十二、天明七年六月二日）も同様に困穀を禁止している。
- (15) 藤田覚、前掲書、二四六〜二四八頁。
- (16) 『国本論』「序」（『日本経済大典』第十三巻）三二五頁。
- (17) 『書経』夏書、五子之歌「其一曰、皇祖有訓、民可近、不可下。

民惟邦本、本固邦寧。予視天下、愚夫愚婦、一能勝予。一人三失、怨豈在明、不見是圖。予臨兆民、懷乎若朽索之馭六馬。為人上者、奈何不敬」。

(18) 이태진 「18—19세기 『민국』 정치사상의 형성과 전개—조선유교정치사상의 근대적 지향—」

『한일공동연구 중간 발표회』 一九九七、同「18세기 한국사에서의 민의 사회적 정치적 위상」

『진단학보』 八八、一九九九、김백철 「조선 후기 영조대 백성관의 변화와 民国」 『韓國史研究』 一三八、二〇〇七。

日本語で読めるものとしては、李泰鎮「朝鮮時代の『民本』意識の変遷と一八世紀『民国』理念の台頭」(『日韓共同研究叢書三 国家理念と対外認識—一七〜十九世紀—慶應義塾大学出版会、二〇〇一)。

(19) 『易経』大象「象曰、山附於地。剝、上以厚下安宅也」。

(20) 『国本論』卷之一 (『日本経済大典』第十三卷)、三二七頁。

(21) 『国本論』卷之二 (『日本経済大典』第十三卷、三二九—三三〇頁)。

(22) 『大学経文講義』「止於至善」(『桑翁公遺書』下卷) 五八—五九頁。

(23) 『大学経文講義』は室鳩巢の『駿台雑話』を多く引用しているが、『駿台雑話』でも儉約が民との相関の關係から論じられている。室鳩巢は、定信の祖父でもあり享保の改革を推進した第八代將軍徳川吉宗の侍講であった。

(24) 『大学経文講義』「治国」(『桑翁公遺書』下卷) 一六十四頁。

(25) 先の引用末尾の「蓄積もととり出る」は、『大学』伝第十章の「貨悖りて入る者は、亦た悖りて出ず」にもとづく。

(26) 『隋書』卷二十四志第十九「食貨」「詔社倉、准上中下三等税、上戸不過一石、中戸不過七斗、下戸不過四斗」。

(27) 三浦國雄『朱子』(講談社、一九七九) 一六六頁。

(28) この時期、朱子は四書集註の大概を確定するなど、經書の注釈書を活発に著述した。『朱子年譜長編』(華東師範大學出版社、二〇〇一) 参照。

(29) 代表的なものとしては、楠本正繼『宋明時代儒學思想の研究』(大修館書店、一九二九)、上田藤十郎、前掲書。

(30) それを自治的なものとして理解したのは、特に近代になっての見方である。たとえば柳田國男は当時農商務省官僚として自治的な「社倉」のイメージから信用組合の実施を試みた(柳田國男『時代と農政』)。この点について、詳細は後稿を期したい。

(31) 〈訳〉米六、七千俵を買い上げるよう命じて、代官に預けておいて、高利の米を借りている百姓たちに、低利で貸す。

(32) 収録する朱熹の文は、「建寧府崇安縣五夫社倉記」(『晦庵先生朱公文集』、以下『文集』)、「婺州金華縣社倉記」(『文集』第七十九卷)、「建寧府建陽建長灘社倉記」(『文集』第七十九卷)、「建寧府建陽縣大關社倉記」(『文集』第七十九卷)、「邵武軍光澤縣社倉記」(『文集』第八十卷)、「常州宜興縣社倉記」(『文集』第八十卷)、「建昌軍南城縣吳氏社倉記」(『文集』第八十卷)、「浦城縣永利倉記」(『文集』第八十卷)、「江西運司養濟院記」(『文集』第七十九卷)であり、『文集』の「社倉記」を余すことなく載せている。

(33) その他、「社倉」について言及している著述として以下のもの

のが挙げられる。山鹿素行『山鹿語録』（『山鹿素行全集』）、

浅見綱斎『社倉法師説』（『浅見綱斎集』）、大月履斎『燕居偶筆』

（『日本思想大系』三十八）、農夫酒彦『社倉解話』（『日本経

済大典』第四十四卷）、宇佐見瀧水『社倉考』（『日本経済叢書』

卷十一）、斎藤正謙『救荒事宜』（『日本経済大典』第四十六卷）、

三輪執斎『救餓大意』（『日本経済叢書』卷六）、などがある。

加地伸行『中井竹山・中井履軒』（明徳出版社、一九八〇）

（34）『社倉私議』（『日本経済大典』第二十三卷）五四七～五四九頁。

（35）『東京市史稿』産業編 第三十一「松平定信意見書」天明七

年六月。

（36）上田藤十郎、前掲書、十頁。

（37）『字下人言』『郷倉の整備』（『字下人言・修行録』岩波書店、

一九四二）九〇頁。〈訳…享保の時代に設置された大坂の御

蓄糶も、半分以上取り出し、江戸の御囲米も無名無実にな

っていた。〉

（38）藤田寛『松平定信』（中央公論社、一九九三）、六六～八五頁。

（39）『江戸町触集成』九卷『七分積金令』寛政三年十二月二十九日。

〈訳…全ての藩においては諸大名の開穀を始めとして、京都・

大坂そのほかなどには凶年の備えがあるけれども、江戸は

その備えもないので、町方を改正の上、町入用の費用を減

少し、これで非常の備囲粗ならびに積金をしておかなけれ

ばならない。〉

（40）『字下人言』『社倉』一五四～一五五頁。

（41）『字下人言』『郷倉の整備』九一頁。〈訳…大坂三郷において

仁恵に感戴して多く出した。〉

（42）藤田寛、前掲書、六八頁。

（43）『東京市史稿』産業編 第三十七「町入用減方評儀二付書取」

寛政三年十二月十三日。〈訳…地主は人数が少なく、小前は

多数であるから、多数の人々の気持ちに合うことはなおさら

永続にできるところと思う。（中略）永久のことであるから、

今一応意見を尋ねている。〉

（44）『字下人言』『郷倉の整備』九二頁。

（45）島田虔次『大学・中庸』（朝日新聞社、一九六七）、一一四頁。

（46）『大学経文講義』『治国』（『楽翁公遺書』下巻）一五八頁。

（47）『大学経文講義』『治国』（『楽翁公遺書』下巻）一五八頁。